

# 学校で地域を 紡ぐ

—『北白川こども風土記』から—

菊地 暁・佐藤守弘 編

小さ子社



はじめに

——一九五九年のへこども風土記から——

「へこども風土記」とよばれる作品群がある。日本民俗学の創始者・柳田國男の新聞連載をまとめた『へこども風土記』（一九四二年）が嚆矢となり、戦中、戦後、そして現在に至るまで、数多くの「へこども風土記」が書き継がれてきた。それらは、子どもたちのために書かれた平易な読み物であったり、子ども時代を回顧したノスタルジックな散文であったり、子どもたちの生活に迫ったりリアルなドキュメントであったり、子どもたちが自ら筆を執った学習の成果であったりする。「へこども」と「風土」と「記」の結びつきは、じつに多様だ。

本書が中心的に取り上げるのは、京都市立北白川小学校編『北白川こども風土記』（一九五九年）である。京都盆地の東北に位置する北白川は、旧石器遺跡をもつ歴史ある土地であり、京と大阪を結ぶ街道沿いの近郊農村として発展したが、昭和初期から住宅地化が進行し、伝統的な生活は急速な変貌を遂げつつあった。この北白川で一九四六年に生まれた「戦後の子」四八名が、三年間



の課外学習をまとめた成果が『北白川こども風土記』である。そこには、風土、歴史、産業、生活、風習など、北白川という地域にまつわるさまざまなテーマが収められ、地域の来し方と変わり続ける現在が、子ども自身の視線から丁寧にすくい上げられている。国立民族学博物館初代館長・梅棹忠夫をして「これはおどろくべき本である」と言わしめたのも、故あることといわねばなるまい。

児童たちは、いかにして自らの地域社会を発見し、記述していったのか。その学びを教員や周囲の大人たちはどのようにに関わり、支えていったのか。その成果が出版され、さらには当時の日本映画ブームを支えた脚本家・依田義賢の手で映画化されるまでに至ったのは、どのような経緯があったのか。そして、そのようにして生み出された『北白川こども風土記』は、当時そして現在の北白川の人々に何を残したのか。本書は、こうした一群の問いに答えようとするものである。民俗学、歴史学、考古学、地質学、学校資料論、視覚文化論、メディア論、アーカイブ論……さまざまな分野の研究者、クリエイター、ファシリテーターたちが、この不思議な魅力をたたえたテキスト、それを生み出した北白川という地の歴史的・文化的コンテキストと向かい合った結果が本書である。



急いで付け加えておかなければならないのは、本書を北白川「についての」本に留めるつもりはさらさらない、ということだ。そうであることは間違いないが、この地のこの本を深く掘り下げるのは、あくまで課題を多面的に浮かび上げさせるためのアプローチであり、その先に、北白川「から」、さらにいくつもの〈こども風土記〉に光を当てていくことこそが、本書に集ったメンバーたちの野望なのだ。

〈こども風土記〉を冠した作品は各地に存在し、そのような名称を用いずとも、生活綴方、総合学習など、子どもたちが地域を学ぶ取り組みはそれこそ無数に広がっている。この実践の蓄積は、学校で学ぶ子どもたちにとっても、地域で暮らす人々にとっても、看過しえない貴重な財産なのではないだろうか。

あらためて確認しておきたいのは、学校が、子どもたちの学びの場であると同時に、多様な情報と社会関係が交錯する、地域の結節点だという事実である。近代日本の学校は、既に一世紀半の歴史を有している。そしてしばしば、〇〇周年などを契機に、校史を編纂し、関連資料を収集し、郷土資料室を開設する。学区にまつわる古文書、写真、民具など、地域資料が学校に残されているのは



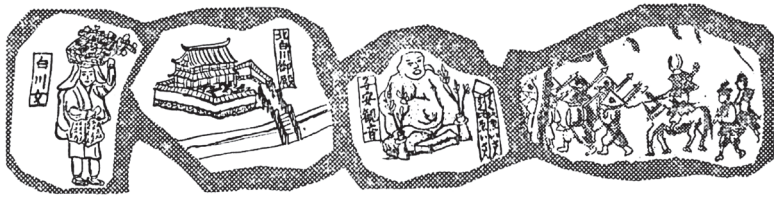
ごく普通のことなのだ。義務教育に関わる小中学校が全国くまなく設置されていることを考えると、それらの総量は膨大なものに上るだろう。

〈こども風土記〉をはじめとした「学校資料」は、地域の来歴を解き明かし、将来を展望する上で、重要な足がかりとなり得るものだ。にもかかわらず、適切な関心と管理に与るとは限らず、校舎の改築や学校の統廃合の際、散逸・廃棄などの危機に晒される。そうでなくとも、ブラック労働化が指摘されて久しい近年の教員待遇を考えれば、学校だけに責任を押し付けるのはあまりに酷といえよう。地域住民や専門家が分担して関与していけるような、開かれたサポート体制の構築が望まれる。本書が詳述する『北白川こども風土記』の経験は、あらゆる地域の学校に関わる人々、学校で地域に関わる人々に、なにかしらのヒントを与えるものだろう。

学校で地域を紡ぐ。北白川から、さらにいくつもの〈こども風土記〉へ。それが本書の願いである。

菊地 暁





## 目次

はじめに——一九五九年の〈こども風土記〉から

菊地 暁

2

### 『北白川こども風土記』抄

大文字の送り火

11

石器時代の北白川——小倉町の遺跡——

23

白川街道を歩いて

33

小さなおじぎょうさんたち

45

天神さんのお祭

47

湖から盆地へ——北白川の地形——

56

白川石と石屋さん

60

古い地名は生きている

68

『北白川こども風土記』目次一覧

81

北白川こども風土記の出来るまで

山岡 亮平

83

序章 学校で地域を紡ぐ

——北白川から、さらにいくつもの〈こども風土記〉へ

菊地 暁

89

column1 北へ渡った『北白川こども風土記』

——北海道綴方教育連盟事件と坂本亮

菊地 暁

135

column2 敗北の「こども風土記」

福島 幸宏

139



column3 「こども風土記」の魅力に迫る —— 「発見者」から「発信者」へ

一色 範子

144

こども風土記一覽

一色 範子

157

第1章 京都市立北白川小学校の郷土室

—— 学校博物館の活動とその役割の可能性

村野 正景

167

第2章 地域のちから —— 『北白川こども風土記』の出版

堀内 寛昭

198

column4 『北白川こども風土記』にかかる学校所在資料

村野 正景

210

column5 北白川小学校と「おやじの会」

池側 隆之

217

第3章 〈先生たち〉〈おじさんたち〉と地域の歴史

黒岩 康博

220

第4章 戦後社会科教育と考古学

石神 裕之

240

第5章 評言からみえるもの

—— 小中「総合的な学習の時間」から「生涯学習」へ

高木 史人

258

column6 上山春平と北白川城

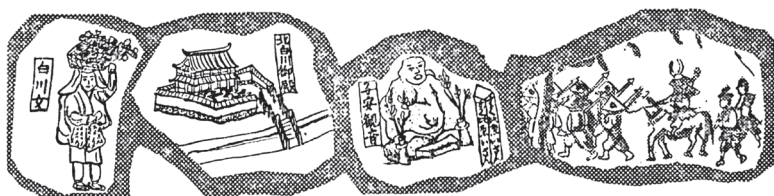
菊地 暁

289

column7 小林行雄と北白川

石神 裕之

294



こども風土記33選……………一色 範子・菊地 暁・佐藤 守弘 301

白川道中膝栗毛……………谷本 研・中村 裕太 313

「白川道中膝栗毛」について……………佐藤 守弘 328

第6章 綴ることと彫ること——『北白川こども風土記』の視覚……………佐藤 守弘 333

column8 映画『北白川こども風土記』と脚本家・依田義賢……………森脇 清隆 355

第7章 関係性を紡ぐ——メディア・プラクティスとしての『北白川こども風土記』……………池側 隆之 360

第8章 新編 湖から盆地へ——北白川の地形と風土 その成り立ちと変遷……………藤岡 換太郎 379

あとがき……………佐藤 守弘 400

※ 目次およびコラム冒頭のイメージは『北白川こども風土記』より引いた。